

史林

第一卷 第四號

大正五年十月一日發行

研究

清凉寺釋迦像に就て

文學博士 松本文三郎

我邦俗間に三國傳來の佛像と稱するものも往々にして存するが、何れも信を措くに足らぬ。唯其中でも嵯峨清凉寺に於ける釋迦立像は、一種の著しき特徴を有する。其三國傳來の事實は固より疑ふべきであり、又其顔面兩手の如きも、到底之を古代に求むべからざるものであるが、其衣褶の彫此に其縁起に就き仔細に研究せざるを得ぬ。

清涼寺釋迦像の奮然の入宋將來する所たるは、人の普ねく知る所である。奮然の高足盛算は嘗て「瑞像記」を作り其傳來を述べたやうであるが、其書今本寺に傳はらぬといふ。固より此瑞像記なるものは、全部盛算の作る所ではなく、後に説くが如く主として支那に於ける縁起を寫し、更らに日本傳來の事情を書添わたに過ぎなかつたものらしい。而して彼永正十二乙亥の歲に成れる「清涼寺縁起」中の釋迦像に關する記事は専ら「瑞像記」に據り、之を敷衍したものとされる。で此には姑らく清涼寺縁起に據り、釋迦像由來の要點を述べ、而る後他の記録に及ぶこととする。

「縁起」には先づ増一阿含や造像功德經によつて一時佛が祇園精舎より忽然其形を隠し、忉利天に上つたので、拔嗟國主優填王は渴仰の餘り、國中の巧匠を召して栴檀香木を以て佛の形像を作らし

めたことから、其後佛が忉利天より僧伽尸國に降つた時には、優填王は其造る所の像と共に彼處に至り佛を迎へたことを説く。時に世尊も瑞像も二尊共に祇園精舎に至らんとし給ふて、瑞像世尊に向て言く、前に進で精舎に入給ふべしと。世尊又像に語てのたまはく、止々、我化縁は久しからずして涅槃に入べし。汝は世間に在て衆生の利益久しからむと。問答再三往復す。遂に瑞像前に進で本座に歸り給ふ」とある。それから瑞像の西域に移る縁起を述べて、瑞像の造られてより此に一千三百七年、(西晉愍帝の建興四年丙子の歲)印度に「王あり其名を弗舍密多といふ。佛法を破滅して此靈像をも失ひ奉らんとす」。爾時鳩摩羅什の父鳩摩羅琰なるもの、此瑞像を負ひ震旦に渡らんとし途に龜茲國に過る、龜茲國王白純大に喜び、靈像并びに琰を請じ、留めて之に供養恭敬した。既に

して彼符堅の命によつて其將呂光、龜茲を伐ち、
靈像并びに瑣の子什を將て、太元十一年秦に還る。
是れより先き堅、姚萇の爲めに殺され、萇自立し

て後秦と稱す。依つて呂光亦自立して國を後涼と
いふ。姚萇死し、弘始三年成光亦萇の子興の爲め
に討たれ、瑞像、羅什と共に長安に移る。で瑞像
の支那に來たのは東晋の太元二年丑前秦の建元十
三年といふ。其後劉宋の高祖長安を敗るや、之を
江南龍光寺に移す。爾來宋齊梁陳の間何等の異變
もなかつたが、隋の開皇九年更らに之を淮南揚州
の長樂寺に移す、後の大雲寺(唐の武后)といひ、
開元寺(同玄宗)と稱するもの即ち是れである。更
らに降つて五代南唐の天福年中には、江都の南、
昇州金陵の建業城長光寺に安置し、宋の太祖の天
下を一統するや、其乾德二年に東都の梁苑城の左
街開寶寺に遷座し、同じく太宗は始め禁中の滋福

殿に迎ね、後又西化門外啓聖禪院を建立して之に
移せりといふ。是れが齋然入宋當時に至る迄の支
那に於ける瑞像の略歴である。

齋然は太宗の大平興國八年を以て入宋し、其翌
年帝の敕許を得、佛師張榮なるものをして彼瑞像
を摸造せしめた。「緣起」には「新作の像をふすへ
奉れば、いさゝかも古佛にたがふ處ましまさず」
ともいふ。而して「緣起」に据ると齋然は靈夢によ
つて此新舊兩像を取換ね、我邦に將來したのであ
るが、

「宋の」王臣これを見て更に怪事なし、甚妙の
靈驗筆にもをよびがたし。盛算が記録のうち
にも二尊相代給事をばわざとのせず。もし記
録にあらば、たとひ一旦かくすといふとも遂
にあらはるべし。叡聞に達せば齋然つみをね
んと疑なし。故に深く秘して、張榮の所作の

新像を供奉ると傳記にはのせたり(盛算が私の日記には之を實記云々)

聖觀音禪院、借得開寶寺永安院本寫取。日本東大寺渡海巡禮五臺山盛算記

といつてあるが、固より信すべからざることで、斯かる歷代朝野の歸依を受けた秘佛の、斯く容易に取換得らるべき筈はない。尙然は宋の雍熙三年に其摸造の瑞像を得て歸朝し、始め之を大極殿に置き、三年の後北野蓮臺寺に移し、更らに嵯峨の栖霞寺を經、清涼寺の成るに及び、之に安置するに至つたのである。

釋迦像に關する緣起の概要は先づ上述の如くであるが、前にも説いた通り、此緣起の元と盛算の「瑞像記」に据つたものたるは「緣起」の文によつても能く之を推察し得らるゝ。而して盛算の記は、彼の入宋中、五代人の記録を寫取つたものであることは左の識語によつても明かである。京都府寺誌稿

雍熙二載乙酉十二月十八日、於梁園城左街明

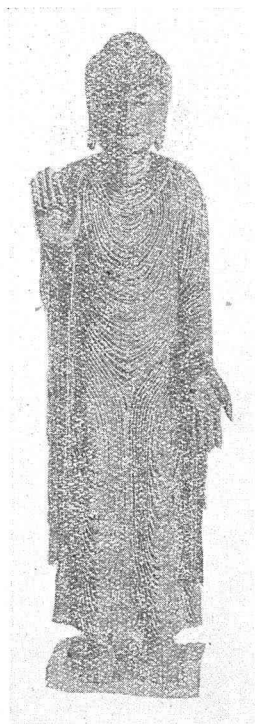
此に開寶寺とあるのは即ち宋高祖の瑞像を移置いた所である。「緣起」には「盛算法師彼地藏院開元りにとゞまりて、いにしへの傳記等……記とゞめて京にいたり」とあるが、地藏院とは觀音院の誤であらう。所謂古の傳記とは五代天福中瑞像の安置せられた金陵長光寺の沙門楚南の書いた「梅檀釋迦文佛略讚」や(此文の終には大周顯德五年、養生八葉記之とある、顯德五年は西曆九五八年に當る)同江都開眼寺の沙門十明の「優填王所造極檀釋迦瑞像歷記(此篇末には壬辰年三月十有二日甲午記の文あり、壬辰は吳の太和四年、西曆九三二年である)抔をいふのである。で今此「緣起」を以て彼に比するに、其言々々殆んど同じい、唯「緣起」では隋の文帝開皇九年に彼像を長樂寺に移

し、煬帝の時寺を道場と號したとあるのが、「略讚」には「隋煬帝駕幸揚州、遷于開元寺」〔即長樂寺〕となつて居るだけである。

是れに由つて觀れば釋迦像の緣起は大體五代の時に其形を成したものでらしい、勿論後にも説くが如く唐の時既に多少斯かる傳説の存したこと

は疑ないが、經典や僧傳等の文を補綴して、此釋迦像に附會したのは、恐らく五代に始まつたものと信ずる。

尙ほ奮然の摸造せしめた原像は、支那に於て其後如何なる運命に遭遇したかは、今此篇には直接關係のないことのやうであるが、後に必要があるから、此に一言して置く、特に康熙帝の之に關す



る文は亦多少の參考に資すべきものがないでもない。彼原像は我邦に於けると同じく、清朝に至る迄、歴代帝王の尊信歸依を受けたもの、如くである。元の念常の佛祖歷代通載や清の大學士高士奇の金龜退食筆記に据れば、此像に關しては元の翰林學士程鉅夫の

瑞像殿碑なるものあり、又明代に於ても成都の釋紹乾は梅檀瑞像來儀記を作り

萬歴の丁酉^{廿五年}八月之を碑に刻したともある。尙ほ同僚寺本婉雅師の厚意により、特に余の爲めに調査せられた所によると、西藏丹殊爾（第八十五函の終）にも畏兀兒語より西藏語に重譯した「梅檀瑞像傳來畧記」なるものがある。其文は元の世

祖中統四年を以て終つて居るから、其原文は程鉅夫の撰文よりも尙ほ數十年前に出來たものらしい。が要するに此等は何れも五代の十明や楚南の記に基づき、次第に其後のことを書加わつたに過ぎない、而して康熙帝の北京皇城内に宏仁寺を建て瑞像を此に移すや、更らに明以後の事實をも附記し、御製の宏仁寺碑文と同じく、梅檀像佛西來歷代傳祀記とを碑に刻して立てられたのである。で今其歷代傳祀記を見ると、始め優填王の之を造つた因縁を説き、次に西域の傳來を述ぶるのであるが、傳祀記にも程鉅夫の瑞像殿碑にも鳩摩羅琰將來のことは説いてない。是れは果して其事實を疑つて載せなかつたのか、或は五代人の記に悉くす所は之を省略に付したのか、何れとも判らぬ。何れにしても宋の太祖に至る迄は、單に其年數と安置の場所とを記すのみである。即ち

始自西域傳至龜茲、六十八年至涼州呂光の時、一十四年藏文には四十年に作る至長安姚興の時、一十七年藏文には十年に作る至江左劉宋高祖の時、百七十三年至淮南瑞像殿碑には百七十二年に作る、三百一十七年復至江南瑞像殿碑并藏文に隋文帝の時、三百一十七年復至汴京宋太祖代の時、二十一年北至汴京宋太祖代の時、此迄は前の清涼寺緣起に説いた所と大體同じい、傳祀記には更らに之に次ぎいふ、

百七十七年來儀記には百七十六年に作る金太宗於辛亥歲迎至京、建水陸安奉於閔忠寺瑞像殿碑には聖安寺に作る、十二年是歲金熙宗、於上京建大儲慶寺成奉迎于積慶閣中、二十年來儀記には二十八年に作る金國海陵王復南迎還燕宮內殿、居五十四年、元朝丁丑歲三月會內殿火、尙書石扶公迎往聖安寺藏文傳來記は此で終る、一十九年歷代通載五十一年に作る至元世祖至元十二年乙亥、遣大臣孛羅等、備法駕音伎、奉迎入萬壽山仁智殿、居十五年丁丑建大聖萬安寺、二十六年己丑自

仁智殿奉迎於寺之後殿、百四十餘年、

程鉅夫の瑞像殿碑は此處で終り、紹乾の記は之に續くのである。

自爾遜于慶壽寺、至嘉靖十七年、居百二十餘年、因寺回祿表聞於上奉迎於鷲峯寺、

紹乾記には此次に「至今萬曆二十五年丁酉居八

五の誤か

十八年」とあり、御製碑文には「至康熙四年乙巳居一百二十七年」としてある。尙ほ御製宏仁寺碑には「今特擇景山西之善地、創建殿宇、於康熙四年十月廿七日自鷲峰山寺、遷移供奉」といふ^(四)。而して此等の碑は何れも康熙の五年四月に建てられたものである。吾人は此等縁起によつて、略和漢に於ける瑞像變遷の状態を知り得たと思ふ。

(一) 拔嗟は梵語 Vasā 嶺の義にして、種族の名、拔嗟國は Vasā-
desā、橋賞彌(又拘昧彌)は其都である。

(二) 縁起の年數干支には誤寫もあらうと思ふが、甚だ事實に相

違した點が尠くない。例へば縁起に「東晉の第十主、安帝隆安二年、戊戌のまは、後秦の姚萇の子、姚興 弘始三年戊戌にあたる」とあるが、隆安二年は戊戌であるが、皇初の五年で弘始三年ではない、又弘始の三年は辛丑で戊戌ではない。又瑞像井びに羅什が弘始三年に長安に來り、「又十四年を経て、東晉の安帝、義熙七年辛亥は、即姚興弘始十六年辛亥也……同廿年乙卯は彼靈像を得て後十八年をへたり」とあるが、義熙七年は弘始三年から十ヶ年後で、十四ヶ年でなく、又此年は弘始の十六年ではなくして、十三年である。尙ほ廿年乙卯とあるが乙卯ならば十七年で、廿年ではなく、又靈像を得て後十八年といふも誤つて居る。弘始三年からは十五年に過ぎぬ。其他斯の如きの例は一々列擧の煩に堪ぬ。

(三) 此年數も固より信するに足らざるものが少くない。佛滅より千二百八十餘年(程鉅夫は八十五年とす)といふが如きは先づ姑らく之を置くも、六十八年にして龜茲から涼州に至るといふのは、何を基本とし計算したものが更らに判らぬ、羅什の父羅琰が龜茲に來た年は、未だ何れの書にも發見し得ない。又涼州にあること十四年にして長安に至るといふも、長安に移つたのは弘始の三年で、呂光の秦に還つたのが大安の年だとすれば、少くとも十五年であり、清涼寺縁起に十二年とするも

同じく誤つて居る。だから此等の數字は極めて大體のものと思ふ。見なければならぬ。

(四) 韻威秘書第七集第一冊。佛祖歷代通載卷三十六。稱檀瑞像來儀記拓本寫。尙ほ藝文「瑞像記」は、元の世祖癸亥の歲(中統四年、西曆一二六三年) Am-cha なるもの支那語より畏兀兒語に譯し、更らに Danasi 畏兀兒語より西藏語に重譯するものといふ。

II

釋迦像の緣起を論せんとするに當つては、先づ以て所謂優填王造像の如何なるものであつたかを明かにし置かなければならぬ。一體優填王(又鄔隨行那 Udayana 出愛と譯す)とは佛と同時に、憍賞彌(Kausāmbi)の國主であつたから、當時固より佛像の造らるべき筈はない^(五)、何れ後世附會の説たるは疑を容れないのである。が併し斯かる符會の説を構成するに至るには、必らず其地方に於て附會せらるべき佛像があつたに相違なからうと

思ふ。だから此に優填王の造像と稱するも、是れは單に其像の符號であつて、固より王の造らしめた佛像の意味ではない。

阿舍經の所説によれば、前の緣起にある如く佛が三十三天に上つた時、優填王が憂愁し、國內の工匠に命じ、牛頭栴檀を以て五尺の形像を造らしめたとある^(六)。而して尙ほ同經には憍薩羅の國主波斯匿(又鉢邏犀那特多 Pasenadi 勝軍と譯す)は優填王の佛像を造れるを聞き、同じく金を以て佛形像の高五尺なるものを作らしめたといふ。是れが抑も印度に於ける佛像製作の嚆矢であるとなすを以て見れば、舍衛國(憍薩羅國の都)に金像のあつたことも推せらるゝのみならず、木金兩像の起源を彼等二王に歸し、其製作をして權威あらしめ、佛敎者舊來の佛像は神聖にして肉體の形を以て表顯すべからずといふ思想と相容れざるにも關はら

ず、一般に之を是認せしめんと企てたものと考へる。

木金二像の中、勝軍王の像に就いては此に直接關係はないが、併し後世では又往々優填王造像と混同せられて居るから、序を以て一言して置く。

是れは舍衛國祇洹精舎に存する所で、阿舎にも明かに「如來形體黃如天金、今當以金作如來形像」ともあるから、金像でなくてはならぬのである。然るに紀元後四百年代の初、法顯が祇洹精舎に於て勝軍王造像は牛頭栴檀で作られてあつたといふ^い。木像と金像とを誤る如きは事實有るべからざること、信ずるから、阿舎の記事が木金兩像を誤つたか、然らざれば其後何等かの事情によつて金像が木像と取換わられたもの^いとしか考へられぬ。尙ほ法顯によれば此木像は其後火災に遭ひ、精舎共に燒失し、更らに其後處を異にし顯はれたといふの

であるから、此時或は前の金像も損傷し、木像を以て代わたのかも知れぬ。然るに唐の初玄奘が彼に至つた時には、西域記に据ると單に故基の中一甌室あり、中に佛像ありといふのみで、木金何れか明かならぬが、慈恩傳によつて之を見れば、明かに「中有金像」とある^い。若し是れが眞であると思へば、木像が其後更らに金像と變わられたもの^いと思れる。特に玄奘の時には、精舎も荒廢最も甚しく、僅かに其故基を存するのみであつたから、故像も既に無くなつて居たのではなからうか。斯く幾度も變遷を経たとすれば、傳説のみは依然として其地に存して居たとしても、所謂勝軍王の造像の屢々其面目を改めたことも殆んど疑を容れない。

然らば所謂優填王の造像は如何といふに、是れ亦彼と同じく(寧ろ一層甚しく)時代と共に其轉變

を免さぬ。阿合によれば、前に記した如く此像は牛頭栴檀で作られ、立像坐像何れとも判らぬが、高五尺のものである。所が造像功德經に据ると、優陀延(即ち優填)王は工匠に命じ「今造像應用純紫栴檀之木、文理體質堅密之者、……應作坐師子座、結加之像」とある、即ち是れは紫檀の材で、

結跏の坐像である、のみならず「其像加趺坐高七尺、面及手足皆紫金色」とあり、箔を塗つた高七尺の像となつて居るハ。更らに觀佛三昧經に至つては「優填王戀慕世尊鑄金爲像」といひ、鑄金佛としてある(ロ)。高さも異なれば、其材も同じくない。若し此等何れの經をも信すべしとすれば、吾人は殺んど其適從する所を知らない。若し其何れか一を擇ぶとすれば、經の新古亦容易に判すべからず、阿合なるが故に必らずしも古しとはいはれない、彼擡入の何時生じたかは大なる疑問である。

尙ほ造像功德經や觀佛三昧經や、其他後世の記録によれば、何れも優填王造像は、前の清涼寺縁起にもあつた如く、其後憍賞彌に止まらずして、僧伽施(又僧伽尸 Sakka) 玄奘の所謂刼比他國(一)に移されたものである(二)。で造像功德經では佛の將さに忉利天より降らんとするや、

優陀延王……乘大白象、珍寶綺飾、躬自荷戴所造之像……從其本國向僧伽尸城、

佛は此に其像を見、大に其功德を賞賛したとある。又觀佛三昧經にも、「優填王……聞佛當下、象載金像、來迎世尊」とある。で法顯の僧伽施國の記事中にも此因縁を述べ、「佛從忉利天下時、化作三道寶階、……於階上起精舍、當中階作丈六立像」ともいふ。此には優填王の像とはいつてないが、之を前記二經や、又玄奘等の記事に參照すれば、其所謂優填王造像なることは疑ない。が造像功德

經には七尺の坐像とあるが、此には丈六の立像とあり、到底彼此同一のものは考へられぬ、尙ほ西域記及び慈恩傳には同處之と殆んど同一の因縁を述べながら、「上起精舍、中有石佛像」といひ、石佛像となつて居る^(三)。勿論玄奘は「數百年前猶有階級、逮至今時、陷沒已盡、諸國君王、悲慨不遇、疊以磚石、飾以珍寶、於其故基、擬昔寶階」といつて居るから、當時佛像も既に毀損し、新たに石像を以て之に代わたるので、其材其高共に古と其面目を異にするに至つたのであらう。で玄奘の時の石像は姑らく之を別とするも、其果して五尺か七尺か將た丈六か、坐像か立像か、木像か金像か、更らに其要領を得ない。記事の曖昧不明なるは實に此のみではない。玄奘は一方に於ては僧伽施に於て優填王造像の存することを述べながら、更らに他方憍賞彌國の條下にあつても「城内故宮

中有刻檀佛像、鄔陁衍那王之所作也、……如來自〔初利〕天宮還也、刻檀之像起迎世尊」といひ、慈恩傳にも佛の初利天に上るや、優填王「以紫檀雕刻、以像真容、世尊下來時、像迎佛即此也」とある^(三)。佛の初利天に上つて母の爲めに說法すといふことが既に奇怪であるが、彼より下降するに當り僧伽施と憍賞彌との兩處に同時に下るべき等もないではないか。尙ほ玄奘は于闐國婉摩城に彫檀の立佛像あり、「此像昔佛在世憍賞彌國鄔陁衍那王所作也、佛去後自彼凌空、至此國」ともある^(三)。所を以て見ると、玄奘の時には西域並びに印度に於て、三種の優填造像があつた譯である。以上述ぶる所によつて觀れば、此等諸像は到底之を同一視する譯には行かぬ。其中の何れが果して所謂優填造像なりやは、今日からしては何人も斷言し能はざる所である。が若し余輩をして淡泊

に其想像する所をいはしむれば、先づ第一に于闐國の優填像とは固より信するに足らざるものである。其縁起既に奇怪を極め、其高亦二又は三丈餘ともあるから、如何に解釋を強ゐるも經典の文とは合せない。明かに是れは後人附會の説である。次に憍賞彌の優填像亦信を描き難い。優填造像の憍賞彌から僧伽施へ移つたことは、立契も之を説くのみならず、古典何れも之を明記するを以て見れば、其像の尙ほ憍賞彌に存すべき理由はない。法顯は憍賞彌へ往つたか否明かでないが、斯かる有名なる像が若し當時彼國にあつたとすれば、彼は之より餘り遠からざる地方に迄巡遊し居るのであるから、少くとも其像の存することを聞かない筈はなからう。若し彼之を聞かば必らず又彼に往つたであらうし、又往つたならば之を記さざる筈もない。然るに彼が其紀行中、一言も之に説及ばな

いのは、當時其像の未だ憍賞彌に無かつたことを證明するものとも考ねられる。若し果して然りすれば、憍賞彌の優填像とは、法顯の巡遊以後、即ち紀元四百年から五百年代の間に新たに附會せられたものに相違ない。終りに僧伽施の優填造像に就いては、之を判すること頗る困難である。稍強辨に陷るる恐はあるが、今若し金像と稱するものを以て塗金の像を意義することとし、（金を鑄ての文には合せぬが）五尺と七尺との差は譯者が印度の尺度を支那に換算するに當り多少の變異があつたものと假定すれば、各經典の文は尙ほ幾分會通の餘地を有するものとも考ねられぬではない。(四)が法顯が立像といひ、丈六といふに至つては、之を同一視すること到底不可能である。造像功德經は唐代の翻譯であるから、印度に於て果して唐以前何時頃製作せられたものか明かでないが、増一阿

合は法顯の渡印以前隆安元年(西曆二九七年)の譯
であり、觀佛三昧經は法顯と同時義熙元嘉の間に
翻せられたものであるから、余輩は此に次の結論
を生じ得る、四百年以前の所謂優填造像は五尺の
檀像であつたが、四百年前後何等かの事情により

法顯の見た丈六立像と變化されたものであると。
尙ほ造像功德經が、法顯以前既に顯はれたものと

假定すれば、それは螺髻の坐像であつたといはな
ければならぬ。而して法顯が彼像に就いて優填王
造なることをいはないのは、其變化の後、日尙ほ
淺く、其變異は人の記憶に新たなるが爲め、斯か
る傳説を生ずる違がなかつたのではなからうか。

併し造像功德經なるものが、法顯以後に出來たと
假定すれば、優填像は初め五尺の檀像であつたの
が、次に法顯の丈六立像となり、更らに玄奘の見
た石像と變じ、最後に七尺の坐像となつたものか

も知れぬ。經の製作年代によつて後の二
者の前後するは勿論である。何れにしても所
謂優填王造像なるものは、幾多の變遷を經、四百
年以後にあつては何人も優填舊像を知り得たもの
、ないことは疑ない。

尙ほ此節を終るに望み、二事の附記すべきこと
がある。其一是優填王や勝軍王の造像は、何れも
其製作并びに供養の場所を中印度に取つたことで
ある。印度に於ける佛像の起源は犍陀羅に始まる
のであるが、若し此等經典が犍陀羅に作られたと
すれば、其佛像製作の場所か、若くは少くとも其
供養の場所を、犍陀羅又は其附近に移したに相違
なからうと思ふ。又從來の傳説では何れも木像か
金像としてあるが、石像のことは更らに出て居な
い。而して犍陀羅に於ける彫像の主たる材は石で
あつて、金像は曾て發見せられぬ、恐らく金像は
未だ彼に於て製作せられなかつたものであらう。

で若し彼等二王の佛像が犍陁羅式のものであるとすれば、其材料も亦木や金といはずして、石像としたことゝ信ずる。此理由によつて余輩は優填王や勝軍王の像は何れも中印に製作せられ、随つて直接犍陁羅式のものでなかつたことを推論する、而して中印の造像は三百年頃より始まつたものであるから、彼像も亦必らず邇多式のものなるべきことを斷言するに躊躇せぬ^(五)。

次に阿含經中には優填勝軍二王の造像を相并び書するに關はらず、後世にあつては優填王像のみ獨り人口に膾炙し、勝軍王造像に至つては法顯や玄奘の之を述ぶるのみで、民間寂として聲なきは抑も何の爲めであらうか。思ふに是れは勿論其像の巧拙に由る譯でもなく、又支那に優填像が傳來したからでもない。余輩の推察する所によれば、中印に於ては阿舍にもある如く所謂優填造像なる

ものが始めて製作せられ、其製作に伴ふて彼造像の功德を説いた經典が顯はれ來つたのであらう。で漢譯にあつても彼造像功德經の翻譯以前「造立形像福報經」や之と殆んど内容を同じくする「作佛形像經」なるものが既に翻譯せられて居る^(六)。而して此等經典には何れも優填王造像のみを説き、少しも勝軍王の造像には及んで居ない。阿含經典は支那人の餘り研究する所とはならず、而して彼造像の功德を説いた單行の大乗と稱する經典の流布するに隨ひ、民間には優填王造像のみが最も廣く知らるゝに至つたものと考へる。而して梁より唐に至つては此傾向最も甚しく、塔は阿育、像は優填と相場が定まつたやうである。で彼梁僧傳や道宣の感通錄には、後漢の蔡愔が摩騰と共に將來したといふ畫像迄も、優填王に歸せられ居るを見ても、一般民間の思潮傾向を知るべきである^(七)。

随つて支那後世に於ける優填王造像なる傳説の如きは、其淵源する所を明にせざる以上、吾人は決して容易に信ずべからざるのである。

(五) 雜誌「哲學研究」第一號掲載拙稿「佛像の美術史的研究」參照

(六) 増一阿含經卷二十八

(七) 法顯傳

(八) 西域記卷六、慈恩傳卷三

(九) 唐千闥國提雲般若譯佛說大乘造像功德經卷上

(一〇) 東晉佛地跋陀羅(覺賢)譯佛說觀佛三昧海經卷六

(一一) J. Legge—Record of Buddhist Kingdoms. p. 47.

Note 3. にいふ僧伽陁はカヌーヅの北西四十五哩にして、今尙ほ Sankassam 村に其名を存す。

(一二) 西域記卷四、慈恩傳卷二

(一三) 西域記卷十二

(一四) 尺度よりいへば唐尺は隋尺より短く、隋尺は晋尺よりも更に短かい。通典には隋の一尺二寸は唐の一尺に當るさといひ、隋書卷十六、律曆志には「開皇十年萬寶常所造律呂水尺、實比晋前尺一尺一寸八分六釐」とある。けれども晋にも前尺後尺の別あり、(晋の後尺は前尺に比すれば、一尺六分二釐といふ)、唐にも大小二尺あり、大は二寸を増し、鐘律冠冕湯藥

には小尺を用ひ、其餘の官私の事には大尺を用ゆとあるから、尺の基本が定まらざれば其長短を比較することも困難であるが、晋の五尺が唐の七尺に當るとは如何にしても考へ難い様である。

(一五) 前記拙稿「佛像の美術史的研究」參照

(一六) 作佛形像經も造立形像福報經も共に失譯經であるが、現藏本では前者を後漢錄に附し、後者を東晉錄に出してある。

是れは開元錄の訛に據つたのであるが、開元錄は亦費長房の歷代三寶記を襲踏したに過ぎぬ。若し之をして後漢の時既に翻譯せられたとすれば、所謂優填王造像なるものも、亦複多式たるを得ないことなる。魏多朝は約紀元後三百年を以て始まり、後漢は三百年の初を以て終つて居るのである。併しなから後漢の譯とは到底信すべからざるのである。作佛形像經は僧祐の出三藏記集中、新集續撰失譯雜經錄にも

作佛形像經一卷或作優填王作佛形像經 或云作像因緣經とある。而して僧祐は、此等の經に就いて次の如くいふ、

將是漢魏時來歲久錄亡、抑亦秦涼宣梵成文屆止、或晋宋近出忽而未詳、譯人之闕始由斯歟。

即ち其經なるものは漢魏に出づるか將た晋宋に出づるか、固より容易に之を判すべからざるのである。然るに費長房は僧祐に據ると稱し、妄りに之を後漢錄の末に附したのは、何等

其理由を發見し得ないのである。吾人は唯此等失經譯の梁以前既に存したことを知り得るのみである。

(一七)唐麟德元年終南山釋道宣撰、集神州三寶感通錄卷中には南齊王琰其詳記を案するにいふ、漢の明帝發使天竺、寫致經像、表之中夏、……初使者蔡愔將西域沙門迦葉摩騰等、齋像。王書釋迦倚像、帝重之。

而して梁の慧皎高僧傳(卷一)にも法蘭の條下「又於西域得齋釋迦倚像、是優田王栴檀像師第四作也」とある。何れにしても其奇怪にして信ずるに足らざることは論を俟たぬ。

三

優填王造像の如何なるものなるかに就いては、前節略之を論じたから、此には再び緣起に還つて之を説く。緣起には、當時印度に弗舍密多なる國王あり、佛法を破滅して、此靈像をも失はんとしたにより、羅什の父の鳩摩羅琰なるもの之を悲み、忽ち出家して此靈像を負ひ、龜茲國に至つたといふ。此にいふ弗沙密多とは果して何時、如何なる人であるか。

此弗沙密多の話は、疑もなく雜阿含の記事に據つたものである。同書卷二十五には孔雀王朝の末王として、泐沙密多羅の名を擧げ、之に次ぎていふ、

時王殺害比丘、及壞塔寺、如是漸々〔摩揭陀國より〕至婆伽羅國、又復唱令、若有人能得沙門釋子頭來者、賞之千金、……彼王終亡、孔雀苗裔於此永終。

此經も勿論後世の摺入であるが、當時佛教者の間には斯かる傳説もあつたものと見ゆる。而して此には佛像のことはないが、沙門を殺し、一切寺塔をも破壊すところから、佛像の如きも固より之を毀損せんと欲したのは當然のこと、想像せらるゝ。此話を此に持來つたことは、果して五代の時から既に存したか否は明かならぬが、吾人は最も作者苦心の存する所たるを認めなければならぬ。世界

最初の靈像といはれ、上下歸依の最も盛なる佛像をして、西域邊鄙の地に移すに當りては、何等か此に重大なる理由がなくてはならぬ、而して此話の如きは之に對し最好の口實を與へたものに相違ない。併しながら奈何にせん、此にいふ沸沙密多羅とは孔雀王朝の末王ではないが、之に次ぎ起つた所謂スンガ朝なるもの、始祖であり、其王位に即いたのは西曆紀元前一八四年で、其在位年數に關しては諸説あり、或は三十六年といひ、或は三十年といひ、或は六十年といふが、今姑らく之を其最長の六十年と計算しても、紀元前百二十年代となるのである^(一)。羅什は幾歲にして支那に來り、又其父瑛は何年にして羅什を生じたか明かならぬが、兎に角羅什の長安に達したのは、弘始の三年(西曆紀元後四〇一年)であるから、瑛の生れたのは多くとも恐らく之より一百年即ち紀元後三百年以上に溯ることはなからう。若し果して然らば弗沙密多羅と鳩摩羅瑛との間には少くとも四百年の間隔が生じ、到底事實有り得ないのである。縁起には之を以て西晋の愍帝建興四年(西曆紀元後三一六年)としてあるが、此推算の基本の確實なりや否は姑らく之を論じないとしても、其間隔は依然として四百餘年となる。だから弗沙密多羅の話は靈像移轉に對しては、誠に恰好の理由を提供するものであるが、斷じて歴史的事實ではなく、一場の小説に過ぎないのである。

鳩摩羅什の父に瑛(又は炎)なるものあり、同じく出家し、天竺より龜茲へ來たことは、羅什傳の明記する所であるが、彼が果して如何なるものを將來したかは吾人の到底知るを得ない所である。羅什傳には

鳩摩羅什天竺人也、家世國相、什祖父達多、

個儻不群、名重於國、父鳩摩羅炎聰明有懿節、將嗣相位、乃辭避出家、東度葱嶺、龜茲王聞其棄榮、甚敬慕之、自出郊迎請爲國師

とある。羅什の父祖に就き吾人の知る所は唯此に止まる^(元)。彼が三百年代の初、中印にあつたとすれば、當時翹多美術勃興の時であるから、佛像を

も携わ來つたとは吾人の想像し得ざることではない。(勿論傳には單に天竺人であるのみで、其果して中印であるか否も不明であるが、緣起の作者は彼優填造像を將來したとなすを以て見れば、中印と解釋したものらしい。)が歴史は想像の成し得る所ではない。梁代既に知らざるものを、數百千年の後如何にして之を知り得べきであらう。乃ち鳩摩羅琰の彼瑞像を龜茲に將來したといふも、亦是れ一の空想に外ならぬ。思ふに羅什は龜茲に生れ、少時母と共に或は温宿、或は沙勒、或は闐賓に迄

も游學したが、中天竺に往つたことはないのだから、羅什をして靈像を支那に將來せしむるは、勢此に其父琰をして龜茲に齎らさしめなければならなかつたのである。而して琰の天竺より龜茲に來る外、其傳記の不明なるは、偶々彼緣起の作者には好機會を與わたこと、信する。

然らば羅什は如何。所謂優填造像と否とは姑らく之を置く、彼は果して何等かの佛像を將來したるか。羅什傳には彼が如何なるものを齎らしたかに就いては少しも説及ばぬ、唯一「什既率多諳誦、無不究盡」とあるのみである。恐らく彼の涼州に來り、涼州より更らに長安に移れる、多少の經典は之を携わたかも知れぬが、それも餘り多くではなかつたらしい。况んや等身の佛像の如き、固より之を持し來つたとは考わられぬ。勿論呂光が苻堅の命によつて龜茲を討ち、之を敗つた時には、

「光以駝二千^{晉書には二萬さす}餘頭、致外國珍寶及奇伎異戲殊禽恠獸千有餘品、駿馬萬餘匹而還⁽⁶⁾」とあるが、此にも佛像のことは一言も説いてない。のみならず符堅は佛敎に歸依して居たが、呂光は斯かる考

もなかつたものらしいから、果して佛像の貴重なるものがあつたとしても、彼は餘り之に對し興味をも有せなかつたものと思ふ。加之佛敎に歸依し

た龜茲王帛純は、其呂光に敗らるゝや、先づ「收其珍寶而走⁽⁷⁾」ともあるから、若し瑞像が當時龜茲にあつたと假定するも、國王先づ之を以て遁れ、呂光の手に收めらるゝ機會は、寧ろ少かつたといはなければならぬ。

以上述べ來る所によつて之を觀れば、羅什の佛像將來を證明すべき事實は如何なる方面にも之を發見し得ない、のみならず周匝の事情は寧ろ之に反する傾向を有して居る。乃ち羅什の佛像將來の

話は亦是れ一の想像に過ぎない、况んや彼所謂優填瑞像に於てをや。龜茲既に之なし、何ぞ羅什の之を將來し得る道理のあるべきや。

併しながら羅什の龜茲國から檀像を將來したといふ傳説は、其由つて來る所頗る古く、隋唐の間既に其説の民間に傳唱せられて居たものゝやうである。唐の道宣は

〔隋開皇〕十二年於東都圖寫龜茲國檀像、舉高丈六、即是後秦羅什所負來者、屢感禎瑞、故用傳持、今在洛州淨土寺

といふ⁽⁸⁾。茲には單に龜茲國檀像とあるのみであるから、其果して優填瑞像といつて居たか否は明かでないが、恐らく是れは斯く稱して居なかつたのであらう。何れにしても此像は丈六であるから固より印度優填像の記事とも合せぬ、のみならず「緣起」の所謂優填像は、隋唐の際には寺名は種々

に變つて居るが、斷わす揚州の開元寺(隋代には青園寺又は龍光寺と稱す)にあつた。而して此像は隋代東都にあり、唐に至り洛州に移つたといふのであるから、是れは明かに緣起作者の稱する優填造像とは全然別物であるといはなければならぬ。尙ほ彼緣起の作者が優填瑞像と稱する揚州龍光寺の像も、當時同じく羅什將來といはれて居たやうである。で道宣は疑問としてゝはあるが、

江表龍光瑞像人傳羅什將來

といつて居る。乃ち當時俗間には羅什將來の説があつたに相違ない、而して是れが抑も緣起作者の説の由來する所である。然らば隋唐の間羅什將來の瑞像なるものは、少くとも二種あつた譯であるが、思ふに此等は何れも支那國內の製作ではなく外國から輸入せられたものであらう。で民間や俗僧は其像をして成るべく古來の名僧智識の將來に

歸せんとする所から、羅什の將來となり、隨つて龜茲の瑞像となつたのであらう。然らば此龍光の瑞像は果して眞に羅什の將來かといふに、當時既に之に對し異説があつた、で道宣も、又「有言扶南所得」といふ。此兩說中何れを取るかといふに彼は明かに「此非羅什所得、斯乃宋孝武征扶南獲之、……何忽云羅什法師背負而來耶」と斷じ(三)、實に其渡來の國土のみならず、其時代迄も之を明言する所を以て見れば、彼「緣起」に比しては大に信用すべき價值あるものゝ如く思はれる。若し果して此説をして眞なりとすれば、所謂優填瑞像も亦龜茲から來たのではなく、南方から傳へたものとならなければならぬ。

元來扶南國なるものは晋の武帝太康中(西曆紀元二百八、九十年の頃)屢々使を遣はし貢獻し、穆帝の升平の初(同三五七年の頃)にも馴象を獻じ、

更に下つては宋齊の間來つて方物を貢獻したこと
は一再ならぬ。且つ彼は他方、印度とも最も密接
な關係を有して居つた。紀元後四百年代の初には
印度人が來つて其王となり、風俗慣習悉く印度化
し終つたものゝやうである。で宋史等の扶南國條
下にも

其後王橋陳如本天竺婆羅門也、有神語曰、應
王扶南、橋陳如心悅、南至盤盤、扶南人聞之、
舉國欣戴、迎而立焉、復改制度用天竺法、
といひ、橋陳如死するの後も、其子孫代々王位に
即いて居た。且つ其國土の風俗を述べては、

國人所居不穿井、數十家共一池、引汲之、俗
事天神、天神以銅爲像、二面者四手、四面者
八手、手各有所持、或小兒、或鳥獸、或日月、
……死者有四葬、水葬則投之江流、火葬則焚
爲灰燼、土葬則瘞埋之、鳥葬則棄之中野

とある(四)。乃ち少くとも四百年前後に於ける扶南
國には印度移住民の甚だ多かつたこと、並びに其
慣習の全く印度化したことを知るべきである。斯
く考へて見れば宋代扶南國から印度若しくは印度
的佛像の支那に渡來したことは少しも怪しむに足
らぬ。

併し此に唯一の疑ふべきものがある。道宣は「宋
孝武征扶南」彼瑞像を獲たといふが、宋史に據る
と孝武帝が扶南を征したといふことは少しも見當
らぬやうである。のみならず文帝の時代には、元
嘉の十一年、十二年、十五年と頻りに朝貢して居
るが、孝武帝の時には曾て使者の來たことも載つ
て居ない。して見れば宋代扶南から印度佛像の將
來せられたことは、其周圍の事情からは如何にも
可能的であるが、正史の上に於ては到底之を證明
し得ないのである、而して斯かる事の正史に闕く

べき筈もない。或は民間何人か、將來したのかも知れぬが、「孝武征扶南獲之」といふは恐らく事實でなからう。

(一八)拙著「佛典の研究」中「漢譯雜阿含經の現形に就て」參照、尙ほ茲に一言附記したいのは、魏多朝 Skandagupta 王の Mihirī に於ける碑銘には、王の父即ち Kumāragupta の没する以前、弗沙密多羅なる有力なる國王によつて、王家の將に危殆に陥らんとしたのを Skandagupta 討て之を伏したといふことがある。此弗沙密多羅とは如何なる人であつたか、他には更らに顯はれて居ないので全然不明であるが、Fleet は Kumāragupta 河附近に住したものではなからうかと思像して居る。何れにしても此弗沙密多羅は雜阿含の孔雀王朝、又は之に次ぎ起れるものとは全然別であるから、縁起の作者が之を知つて居たとは考へられぬ。又假令之を指示するものとしても、中印摩揭陀は決して彼の勢力の下に屬したものではなく、又彼の中印を侵したのは Kumāragupta (紀元後四五五年没)の晩年に起つたことであるらしいから、先づ四五〇年前後のこと、見なければならぬ。而して羅什の長安に達したのが、本文に述べた通り四〇一年であるから、其父琰の龜茲に往つたのは、少くとも五十年以前(即ち紀元後三五〇年以

前)でなくてはならぬ。そうすれば此に少くとも一百年の間隔を生ずるのである。即ちスンガ朝の弗沙密多羅とすれば、彼は餘りに早く、魏多朝の弗沙密多羅とすれば、是れは又餘りに遅く、何れにしても時代錯誤は免れぬ。Fleet-Corpus inscriptionum Indicarum, Vol. III. 參照

(一九)梁慧皎高僧傳卷二。晉書卷九十二、鳩摩羅什傳

(二〇)魏書卷九十五。晉書卷百二十二

(二一)晉書同上

(二二)續高僧傳卷二十四、釋慧乘傳

(二三)道宣律師感通錄。此書は道宣律師が一神人と感通問答したことを記したといふのであるが、其中記す所は、頗る事實に合する所あり、單に一場の空想、小説と見做すべきものではなく、寧ろ余輩は憚る所あるが爲め神人との感通に託し、其意見を述べたものと信する。尙ほ之と同一のことは法苑珠林卷十四に載つて居る。

(二四)南史卷七十八。梁書卷五十四。晉書卷九十七。

四

尙ほ此に一の考ふべきことがある。正史には顯はれて居ないが、梁の武帝が天監年中に使を中天竺に遣はし、優填王の佛像を摸造せしめたといふ

記事が、唐以後の佛教關係の典籍には屢々載せられて居ることである。是れは果して事實であらうか、若し又事實とするならば、縁起に所謂優填像と何等關係のないものであるか否。先づ其傳説に就いては道宣は次の如くにいふ。

梁祖武帝以天監元年正月八日、夢檀像入國、

因發詔募人往迎、案佛遊天竺記及双卷優填王

經云、……優填王……齋栴檀、…令圖佛相、

…座高五尺、在祇洹寺、至今供養、帝欲迎請

此像、時決勝將軍郝騫、謝文華等八十人應募

往達、具狀祈請、舍衛王曰、此中天正像不可

將適邊方、麗本には此四字なし乃令三十二匠更刻紫擅人

圖相、卯時運手至午便就、相好具足、而像頂

放光……故優填王經云、眞身既隱、次二像現、

普爲衆生深作利益者是也、騫等負第二像行數

萬里、備歷艱關難以具聞。

此に其途中困難の狀を説き、或は山に至り糧食盡きたとか、或は傳送の人衆多く死亡したとか、或は猛獸に逢ふて一心に佛を念じたといふやうな話があり、終に

至天監十年四月五日、騫等達于揚都、帝與百

僚徒行四十里、迎還太極殿、……至太清三年

五月帝崩、湘東王在江陵即位、號元承聖、遣

人從揚都迎上、至荆都承光殿供養、後梁大定

八年於城北靜陵造大明寺、乃以像歸之、今見

在、多有傳寫流被京國。

とある。其他皆之と同一歸旨であつて、唯文に廣略あるのみである。(註五)

梁武の佛教を信する極めて篤かつたことは人の皆知る所であり、當時法顯傳や作佛佛像經や造立佛像福報經前文双卷の優填經は此二部の書を稱するのであるの世に行はれたことも疑なく、且つ王の勢力を以ては八十人の使者

を中天に遣はし、特に彼像を摸作せしめたといふも、決して怪しむに足らぬ。且つ梁書によると天鑿の初、其王屈多、長史竺羅達を梁に遣し、表を奉り、詳しく印度の事情を叙し、中には

臣之所住國土、首羅天守護、令國安樂、王々相承、未曾斷絶、國中皆七寶形像衆妙莊嚴、臣自脩檢如化王、法臣名屈多、弈世王種、惟願大王聖體和平、今以此國群臣民、庶山川珍重、一切歸屬五體投地、歸誠大王、……大王若有所須珍奇異物、悉當奉送、此之境土便是大王之國、王之法令善道悉當承用、願二國信使往來不絶、返還賜一使、具宣聖命、備勅所宣歎至之誠、望不空返、所白如允願加採納、今奉獻琉璃唾壺雜香吉具等物^(三)

とある。印度王からの上表としては其辭禮餘りに謙遜卑下に涉るやうであるが、是れは或は譯者が

當時の梁王に對し、特に斯く譯したものかも知れぬ、又梁の臣下が王威を禪かり、多少其文を修飾したかも判らぬ。而して之を武帝本紀に參照するに、天鑿の二年秋七月に「扶南、龜茲、中天竺國各遣使獻方物」^(二)とあるから、是れが即ち此表を上つた時であらう。天鑿二年は西曆の五〇二年である。彼中天竺の王、屈多とは三百年代摩揭陀附近から勃興し、印度を統一した毘多王朝たることは疑ない。之を印度史に考ふると當時の王は、彼有名なる Yasodharmā と共に Hōra 族の王を生擒し、之を北方迦濕彌羅に放つた幼日王でなくてはならぬ。王は紀元後約四八五年から同五三〇年の間位にあつたといふ^(三)。幼日王亦深く佛教を信じ、或は寺院を建立し、或は衆僧を供養し、尙ほ以て足れりとせず、遂には國を捨て家を出で僧衆中に入り^(四)、其行迹亦能く梁武と相似たものがある。

此佛教に耽溺した南北二王の互ひに使臣を往復せしめ、音信の絶せざるを願ふたのは、偶然ではあらうけれども、亦一奇と謂はなければならぬ。而して梁武の佛像を求めたのが果して天監元年であるとするれば、梁の使者が印度王に至つたので、印度王も梁王の人となりを聴き、使者を派遣したのではなからうかと思ふ。

道宣は舍衛國祇洹寺に於て優填王造像を模したといふが、前にも述べた如く優填像は本來舍衛國にあるべき筈ではない、彼は憍賞彌に造られ、幾もなくして僧伽施に運ばれたのである。舍衛國にあるのは、法顯も之を明記して居る如く勝軍王の造像でなくてはならぬ。如何にして此の如き混同を生じたか。思ふに法顯には勝軍王檀像の祇洹にあるを説き、優填王造像に就いては少しも説いて居ない、(僧伽施の像は之を記してはあるが、王名

を出していない)、然るに形像經等には唯優填王の造像のみを述べて、勝軍王のことは見ぬ。で法顯の之を明記するにも關はらず、祇洹寺の像を以て、(特に法顯では檀像となつて居るから、之を以て)優填王像の誤と推察したのであらう。而して道宣の記事には、「更刻紫檀人圖一相」とあるを以て見れば、當時の舍衛國の像は、法顯の時と同じく檀像であつて、阿舍に述ぶる金像ではなく、又後に玄奘の拜した金像ともならなかつたことが判る⁽⁵⁾。即ち是れは精舎の焦失後取換わられた第二の像でなくてはならぬ。第二の像とはいふものゝ、是れ亦少くとも法顯の渡天以前、即ち紀元後四百年以前中印に於ける造像であるから、勿論多式佛像であつたことは秋毫の疑を容るべき餘地はない。

若し果して武帝の摸造せしめた所が、優填第二

の像として支那に將來せられたとすれば、是れが彼緣起に述ぶる傳來曖昧なる優填第二像と同一なるものでなからうかとの疑の生ずるのは必らずしも謂ないことではなからう。で彼高士奇の如きも緣起にある佛像の傳説を述べ、終りに感通錄を引き之に附して「據此說、又與程鉅夫碑文不同、則此像爲優填之所刻歟、抑天竺之所摹歟」といひ、其疑を存して居る^(三)。

若し之をして緣起にいふ所と同一なりとせば、假令ひ其像、優填の造る所にあらずとしても、少くとも紀元四百年以前のものであり、三國傳來の經過も明了となるのであるが、遺憾ながら是れは緣起にいふ所と全然別物である。道宣の感通錄及法苑珠林には、又次の記事がある。

問荆州前大明寺梅檀像者、云是優填王所造、依傳從彼模來、將至梁朝、今京師復有、何者

是本。

答曰大明是其本像、梁高祖崩、像來荆渚、至元帝承聖三年周平梁、後收薄國寶、皆入北周、其檀像者有僧珍師、藏匿房內、多以財物、贈遣使人、像遂得停、至隋開皇九年、文祖遣使人柳顧言往迎、寺僧又求像令鎮荆楚、顧是鄉人、從之、今別刻檀、將往恭旨、當時訪匠得一婆羅門僧、名真達爲造、即今西京大興善寺像是也、亦甚靈異、本像在荆州。

是れは梁武の將來せしめた檀像と其模像との別を明かにしたのであるが、吾人は又之によつて唐代梁武の本像が何處に安置せられたかを知り得る。而して此道宣の文の後には、梁武の佛像の如何なるものなりやを記しいふ

披觀靈像全檀所作、本無補接、光跡殊異、象牙彫刻卒非人工所成、興善像身一々乖本^(三)

是れ亦大に吾人の參考に資すべきものである。

道宣のいふ所によれば梁武の本像は、明かに唐の麟徳の頃、荊州の大明寺にあつたことが判る。然るに起縁の檀像なるものは、隋より五代天福年中に至る迄は、揚州の開元寺にあり、未だ曾て荊州に移されたことはない。して見れば此兩者の全然別物であることは疑を容れない。梁武の本像の其後果して如何なる状態にあつたか、之を知り得ないのは、吾人の甚だ遺憾とする所であるが、或は火災戦亂等の爲め、早く既に消滅に歸したものがとも思ふ。大興善寺の模像も唐の總章の初、火に焼かれ、其後更らに拙劣なる模像が出来たともいふ。(說郛卷六十七、京洛寺塔記)

梁武の所謂優填王像と縁起の所謂優填王像との關係は、道宣の言によつて全然切斷せられたが、梁代に於ては吾人の尙ほ一の注意すべき事實があ

る。他なし、扶南國が天監十八年に天竺栴檀瑞像

を送り來つたことである。扶南國は前にもいつた如く、當時は天竺婆羅門僑陳如家によつて支配せられ、晋以後宋齊の間、屢々來つて方物を獻したものであるが、梁代に至つては其往來亦殊に頻繁を加わたやうである。僑陳如の死後には持梨陁跋摩王位に即き、其死後更らに閩邪跋摩なるもの代り立つ。閩邪跋摩は天監二年に珊瑚の佛像并びに方物を獻じ、梁帝より安南將軍の號を受け、同十三年累りに使を遣はし貢獻した。此年閩邪跋摩死し、庶子留陁跋摩其嫡弟を殺し、自立して王となり、天監十六年に入貢し、更らに十八年には「復遣使送天竺栴檀瑞像娑羅樹葉并獻火齊蛛鬚金蘇合等香」とあり(三)、爾來其來貢を絶しなかつた。開元錄によれば梁代譯經者として掲げた四人の外國僧の中、二人は扶南人で、直接彼より來たもの

であり、一人は西印度の産であるが魏から轉じて梁に來り、他の一人の、支那譯經者として最も有名なる眞諦も時代は少し後れるが、元とは西印の生で中印にあつたのを、扶南から聘し來つたものである^(四)。是れに由つて觀ても當時中印と扶南、扶南と支那との間、如何に密接な關係の存したか判る、而して扶南から天竺檀像を送來つたことも秋毫怪しむに足らぬ。

此にいふ天竺佛像とは果して如何なる大きさのものであつたか、又何處に安置せられたか、少しも明かならぬが、栴檀瑞像とあるを以て之を想像すれば、是れが彼扶南國から將來された龍光寺の像ではなからうか。扶南からは時代を異にし、諸種の佛像を献じて居るが、栴檀瑞像と稱するものは唯此時のみである。是れが果して所謂優填像であるか否は固より知り得べきでないが、何れ中印又

は其附近に於ける由緒あり若くは由緒ありと稱せられた佛像であるから、特に之を武帝に献じたものと思はれる。道宣が龍光寺の檀像を以て扶南國將來といふのは、洵に善く之と合するのみならず、彼が孝武の扶南から得たといふのは或は梁武の誤寫か、記憶の誤でなかつたらうかとも考へる。若し果してそうであるとすれば、緣起に宋高祖が江南龍光寺に移したといふのも、梁の高祖の誤で、彼は之をして強めて優填像たらしめんが爲めに、姚興羅什等の妄説を附會したものと謂はなければならぬ。優填の像と否とは姑らく置き、既に清涼寺釋迦の原像が明かに印度造像であるとすれば、此解釋が事實上最も可能的のものではなからうか。

(二五) 集神州三寶感通錄卷中、第二十八。廣弘明集卷十五。佛祖統紀卷三十七。

(二六) 梁書卷五十四。南史卷七十八。

(二七) 梁書卷二

(一八) Fleet-Campus Inscript. Ind. Vol. III. Nos. 3335. 371c.
西域記卷四。Smith-Early History of India. 273ff.

(一九) 西域記卷九

(二〇) 道宣が舍衛國に像を求めたといふを以て見れば、假令ひ優填王像と稱するも、梁の使者の憍賞彌へ往つたものでないことは疑ない。又若し憍賞彌へ往つたことすれば、當時憍賞彌の像は、丈六の立像(法顯)が七尺の坐像(造像功德經)か、然らざれば石像(支那)でなければならぬのであるから、阿含の文と合せぬ、隨つて梁武や使者の之を以て満足すべき筈はないのである。

(二一) 高士奇金龜退食筆記卷下。頃者我邦の仲山高陽の「哥譚雞助」を見るに、其中にも蔚然の將來した釋迦像を以て梁武の像を摸するものといふ。此には唯奮記に見ゆとあるのみで、何の書に據つたか明かならぬ。

(二二) 道宣律師感通錄。法苑珠林卷十四。

(二三) 梁書卷五十四。南史卷七十八。

(三四) 開元錄卷六。扶南の二人とは曼陀羅仙と僧迦婆羅(兼鏡)とである。眞諦に就いては開元錄に次の如くいふ。

波羅末陀(眞諦)本西印度優禪尼國人、……歷遊諸國、遂止中天、梁武大同中敷直省張汎等、送扶南獻使返國、仍遣賈中天

竺摩揭陁國、請名德三藏并求大乘諸論雜華經等、……彼國乃
屈眞諦、并賣經論、恭賀帝旨、……以太同十二年八月十五日達
于南海、……以太清二年閏八月始屆都邑。
續高僧傳卷一。扶南國が古來印度と支那との仲介を爲したことは、梁書(卷五十四)中天竺の條下を見ても判る。

五

以上余輩の論じ來る所によつて之を觀れば、清涼寺釋迦像の原像は、固より緣起にいふが如く龜天鑿十八年扶南國の奉獻する所となすの最も可能的なるを信ずる。而して其像の所謂優填造像を摹すといふも、亦固より容易に信すべからざるのである。若し之を摹したものとせば、扶南國人の默して之を言はざる筈はなからうし、又之を言つたとすれば梁書にも必らず其傳説を傳へたことだらうと思ふ。然るに彼には單に天竺栴檀瑞像と書するのみなるを以て之を見れば、其傳説の後人附會

する所たる殆んど疑を容れない。且つ天曆十八年に奉獻したとすれば、武帝の模像は既に梁都に達して居たのであるから、其異同は固より知るべからざるが、若し同ならば均しく優填王像と稱したらうし、若し異ならば之を信すべき理由はない。が兎に角之を以て瑞像と稱する以上は、何等か其因縁がなくはならぬ。して見ると道宣が烏仗那國達麗羅川附近の石窟中、世人未見の佛像を感得したといふのが、抑も此瑞像の名を得た所以ではなからうか^(註)。此像は固より法顯や玄奘が彼地にあつて見た所のものでもなく、又之を摹したものでない。が何れにしても愈以て優填造像でないことは明かとなるのである。思ふに其瑞像と稱する所から、後世之を優填王像に歸し、且つ其傳來をして最も神聖ならしめんが爲め、遂には之を羅什將來となすに至つたのであらう。而して羅什の將

來とするが爲めには、一方には其父琰を通じ、弗沙密多の佛教迫害の話を附會し、他方には呂光姚興を経て宋高祖が之を江南龍光寺に安置したとすに至つたものと思はれる。若し梁武の此に安置したことをすれば、姚興より梁に至る迄所在不明となり、靈像の歴史に間隙を生ずるからである。斯く考うれば此縁起に於て隋文帝以後の記事は、恐らく皆事實であつたらうが、宋高祖以前の文は全然後人の空想に出づるものと謂はなければならぬ。

特に此に余輩の注意し置きたいのは、龍光寺の佛像即ち清涼寺釋迦像の原像は、中印若くは中印附近に造られたか、又は摹せられたもので、決して犍陀羅佛像又は之を摹したのでないことである、是れは如上説く所よりして當然生じ來るべき結論であらうと思ふ。今姑らく清涼寺釋迦像に就いて

之を見るも、薄衣の其全身を蔽ひ、衣褶の線の凸起し、頸を中心とし彎曲の状をなせる如き、一見襴多式と認むべきである。但一の怪しむべきは前

にも説いた如く其顔面と手足(特に兩手)の到底印度式と見做すべからざることである。其面相は支那六朝時代の彫像とも相類せぬ。清涼寺の像は宋初の模造であるから、張榮の原像を模するに當り自から後世彫像の形式が此に顯はれ來つたものと解せられぬでもないが、緣起にも「古佛にすこしもたがふ所なし」とあり、現に其衣褶の彫法を見れば、如何にも善く印度像を摹してある。斯かる技巧を有するものが、顔面や手足に於てのみ獨り之を摹することの出來なかつたとは、如何にしても考ね難いのである。所が高士奇は北京宏仁寺の釋迦像を記して次の如くいふ。(三)

梅檀佛像高五尺、鵠立上視、後瞻若仰、前瞻

若俯、衣紋水波、骨法見其表、左手舒而直、右手舒而垂、肘掌皆微弓、指微張而膚合、三十二相中鷲王掌也。

其「衣紋水波、骨法見其表」とあるは、如何にも清涼寺の釋迦像と適合する。但「指微張而膚合」とは指を稍伸ばして、其指間に膜を張れるが如きを記したものであつて、是れは襴多式佛像に於て常に見る所である。然るに現清涼寺釋迦像には此三十二相中の手足縵網の相はない。乃ち少くとも此兩手は明かに我邦に於て修補せられたことが判る。此縵網の相は印度より傳來し、古代の像に於ては往々見る所であるが、後世には殆んど其迹を絶して居るから本像に無かつたものならば、支那に於て後世特に斯く變化せしめやうとは思はれない。又新舊二像殆んど差別し難い迄に之を模造したとすれば、張榮の獨り之をのみ模せなかつた筈もな

からう。顔面の相に至つては北京の像の如何なりしか殆んど之を知るを得ないが、清涼寺の像は如何にも日本的であり、其白毫の比較的大なる、是れも或は日本に於て補作せられたものではなからうかと思ふ。縁起等によれば清涼寺は鎌倉時代の初既に數回炎上の厄に遭つて居る。即ち

八十二代後鳥羽院御宇建久元年庚戌歲回祿す
武州の慈光寺の信侶上求法師諸人をすゝめて
再興す。廿八年をへて八十四代順徳院御宇建
保五年丁丑にかさねて炎上す、この時は梅尾
の明惠上人貴賤を勸進して造營の功をとげて
云々

とあるのみならず法然上人行狀畫圖（四十八）や百練抄（十三）には承久三年にも火し、此時には往生院念佛房が造營を遂げたといふ^(註)。斯く三回迄も火災に罹かつて居るのであるから、其何れの時か

急速の際之を遷坐せしむるに當り、或は頭部或は手足の破損を受け、其時之を補作したものはなからうか。吾人は斯く考へて此に始めて一切の疑團を氷釋し得るのである。

（三五）道宣の感通錄や法苑珠林の卷十四には、此扶南將來像の縁起を記していふ。

昔佛滅後三百年中、北天竺大阿羅漢優婆塞那、以神力加工匠、三百年中鑿大石山、安置佛窟、從上至下凡有五重、高三百餘尺、請彌勒菩薩指揮、作壇室處之、支辨傳云、百餘尺、聖迹記云、高八丈足跌八尺、六齋日常放光明、其初作時、羅漢將工人上天、三往方成、第二午頭檣檀、第三金、第四銅像、凡夫今見止在下重、上四重閉、……第六百年有佛奈阿羅漢、生已母亡、生扶南國、念母重恩、從上重中取小檀像、令母供養、母終生揚州、出家往新興寺、獲得三果、宋孝武征扶南、獲此像來、都亦是羅漢神力、母今現在。

如何にも不思議な話で、固より深く信するに足らぬ。而して此には北天竺とのみならず、其場所を記していないが、支辨の西域記や法顯傳に参照すれば、本文にいつた如く達麗羅（又は隨羅）川附近の佛像を指すものたるは疑ない。法顯は

其國〔龜屋〕昔有羅漢、以神足力將一巧匠上兜率天、觀彌勒菩薩長短色貌、還下刻木作像、前後三上觀、然後乃成像、

長八丈足跌八尺、齋日常有光明。

さいひ、支那の言ふ所も大體之と同じく、而して終りに

自有此像法流東派

ともいふ。(西域記卷三)此にいふ所は彌勒の像であり、而も其高八丈とあるものであるから、前の傳説には其上層の人の未だ知らざる佛像に歸したのであらう。而して彼説の、特に此像に歸せられた理由は固より不明であるが、法顯傳や西域記中諸種の佛像を記してあるが、僣墳將軍造像を除く外、昇

天して其眞影を摹したさいふのは、唯此のみであるからではなからうか。何れにして此傳説は學術上何等取るべきものではない。

(三六)高士奇金齋退食筆記卷下

(三七)尙ほ降つては寛永十四年丁丑にも清涼寺火したさいふ。

(本國寺年譜十、古事類苑、宗教部三引用)

附記―舊清國宮城内の宏仁寺(俗稱樞檀寺)は其後明治三十三年北清義和團事變の起つた時不幸兵燹に罹り、一千四百餘年の間晉に支那佛教者のみならず、滿蒙西藏人歸依の對象たりし瑞像は今や露國に遷坐奉安せらるゝといふ。(寺本婉雅師談)

小濱港の研究

文學博士 三浦周行

緒言

地方に於ける都市商港の發達は歐洲のそれと同じく我中世史の後期を飾つて居る。政權の分割に

伴つた中央の文化が次第に地方におし擴がつて行つた此時代に、地方文化の中心であつた都市商港の變遷を閑却して歴史の眞相を捕へることは、も